この愛は、誰も汚せない

'96年カンヌ国際映画祭審査員グランプリ受賞
ニューヨーク批評家協会賞 最優秀監督賞・最優秀主演女優賞・最優秀撮影賞受賞
ロサンゼルス批評家協会賞 最優秀新人賞(エミリー・ワトソン)受賞
監督—ラース・フォン・トリアー 撮影監督—ロビー・ミュラー
出演—エミリー・ワトソン/ステラン・スカルスゲールド/カトリン・カートリッジ
1996年デンマーク映画 カラー 2時間38分
提供—アニューズ・トカル チュアル・パブリッシャーズ/テレビ東京/ユーロスペース
配給—ユーロスペース
特別協賛—CHARLES JOURDAN
協賛—TOKYO FM
サントラ—(株)デンタル・メディア・ラボ 原作—幻冬舎文庫刊
CHARLES JOURDAN CINEMA COLLECTION
奇跡の海
Breaking the Waves

CHARLES JOURDAN CINEMA COLLECTION

# 奇跡の海
## Breaking the Waves
## この愛は、誰も汚せない

監督＝ラース・フォン・トリアー 撮影監督＝ロビー・ミュラー
出演＝エミリー・ワトソン／ステラン・スカルスゲールド／カトリン・カートリッジ
1996年 デンマーク映画 カラー 2時間38分 シネマスコープ
提供＝アミューズ＋カルチュア・パブリッシャーズ＋テレビ東京＋ユーロスペース
配給＝ユーロスペース 後援＝TOKYO FM
特別協賛＝CHARLES JOURDAN（シャルル ジョルダン アジア リミテッド）
サントラ＝㈱デジタル・メディア・ラボ 原作＝幻冬舎文庫刊

Grand Prix
Cannes
1996

### ものがたり

❖愛が奇跡を生み、奇跡が愛を生む。ラース・フォン・トリアー監督は『キングダム』に続く長篇第5作目にあたるこの映画を、“ア・シンプル・ラブ・ストーリー”と表現する。

❖1970年代初頭。スコットランド北西部にその村はあった。荒涼とした台地、台地を打ちつける波、そして村を取り囲む海。なだらかな丘の頂上には鐘のない教会があり、人々はそこで祈る。ベスはそんな村に生き、流れ者のヤンに出会う。ベスにとってヤンは、神からの贈り物だった……。

❖仕事のために遠く離れた油田に行かなければならないヤンとの、束の間のふたりだけの生活が始まった。それは愛だけがこの世に存在するかのような生活だった。やがてヤンは油田へ行き、ベスは彼の帰りが待ちきれず、すぐにでも彼が戻ることを神に願う。そしてその願いは、思ってもみなかったような形で叶えられるのだった。

❖常に神が介在するベスの愛は加速するごとに純化し、やがて奇跡を生む。強すぎた愛が生んだ（とベスが信じる）不運な事故でヤンは全身麻痺となり、皮肉なことにベスが望んだ通り彼は彼女のそばを一時も離れない存在になる。一方ヤンはベスに愛人を作るよう説得することで、彼女の愛に報いようとする。“別の男と関係を持つこと”。ヤンと愛の約束を交わした時の戸惑いは、やがて確信に、そして神との誓約にまで昇華する。ベスはヤンの病気の回復と引換えに命までも捧げようとするが、それは決して自己犠牲ではなく、自らが選びえた奇跡への道だった。そして極限の愛の姿でもあった……。

### 96年カンヌ。賞讃の嵐のなかで……

❖1996年カンヌ国際映画祭。審査員グランプリ大賞が『奇跡の海』と発表され、主演のエミリー・ワトソン、ステラン・スカルスゲールドらが次々と壇上に上がるが、そこにラース・フォン・トリアーの姿はなかった。長篇デビュー作である『エレメント・オブ・クライム』を携えて彼が南仏の地に降り立ってから12年が経っていた。この映画で高等技術委員会賞を受賞、さらに『ヨーロッパ』で同賞と審査員特別賞を受賞、3度目のカンヌでの栄冠だった。しかし閉所恐怖症的パラノイアが彼を支配し、飛行機はむろん列車にさえも乗れないその身体をドイツまで運ぶのがやっとで、携帯電話ごしに観客の喝采を聞くしかなかったのだ。2ヵ月も前からカンヌへ行くためにセラピーを受けていたのに。

❖デンマーク映画界の“恐るべき子供”カール・テオドール・ドライヤー以来最高の才能と言われるラース・フォン・トリアーにとって、ラブ・ストーリーは初めての体験だった。しかし、『エレメント・オブ・クライム』『ヨーロッパ』『キングダム』など、映画のテクノロジーに裏付けされた独特の映像美学はここでも健在だ。チャプターごとの映像以外に音楽を使用しないこと、ヴィム・ヴェンダースの撮影監督であるロビー・ミュラーによる全篇手持ちカメラの撮影等々により、ラブ・ストーリー独特の甘さを一掃する。またシーンの間にペル・キルケビーによるデジタル処理された象徴的なパノラマ・ショットが挿入されるが、そのショットには彩色が施され、細密画のように高度に解像され、その他の部分と対照をなしている。

### ベス役との奇跡の出会い、そして音楽

❖主演のベスを演じたのは、今回の作品がスクリーン・デビューとなるイギリス人女優エミリー・ワトソン。当初ジェームズ・アイボリーの作品でお馴染みのヘレナ・ボナム・カーターがキャスティングされていたが、エージェントが性的なシーンにたじろぎ辞退、急遽オーディションが開催されるが、そこに素顔で裸足のまま立っているエミリーを見る。フォン・トリアーは彼女の発見こそが奇跡だったと表現する。またヤン役には『存在の耐えられない軽さ』『レッド・オクトーバーを追え！』に出演したスウェーデン俳優ステラン・スカルスゲールドが、姉のドド役には『ビフォアー・ザ・レイン』『ネイキッド』のカトリン・カートリッジが選ばれた。また脇を固めるのは『グラン・ブルー』で主役を演じたジャン＝マルク・バールや『マイ・プライベート・アイダホ』のウド・キアーといったフォン・トリアー作品ではお馴染みの顔触れだ。

❖チャプターごとの効果的に挿入された音楽は、70年代のミュージック・シーンを代表するスタンダード・ナンバーであるプロコル・ハルムの「青い影」やエルトン・ジョンの「グッバイ・イエロー・ブリック・ロード」、レナード・コーエンの「スザンヌ」などから、モット・ザ・フープル、ロッド・スチュワート、ディープ・パープル、デビッド・ボウイらのレアな曲まで贅沢に使用されており、70年代を一気に蘇らせる。また、エンド・クレジットではバッハによる「シチリアーナ」が魂を葬送するかのように美しく奏でられている。


**'97年春待望のロードショウ！** 特別鑑賞券1500円絶賛発売中！
（当日一般1800円／学生1500円／シニア1000円）

●当劇場窓口および都内各プレイガイド、チケットぴあ、チケット・セゾンにてお求めください。 ●上映時間は当劇場までお問い合わせください。

渋谷・公園通りパルコ3前 ☎03(3464)0051
シネマライズ